

City, Culture and Society(CCS)4号発刊

国際学術誌(City, Culture and Society, (CCS))第4号が発行されました。

CCSは、都市研究プラザが編集を行いエルゼビア社が刊行するもので、人文社会学分野において日本の大学が単独で編集する初の国際的学術誌です。また、都市研究分野の有力学術誌としても、初めてアジアに編集拠点を設けたものとして注目を浴びています。

第4号は、Kevin Stolarick氏、Brian J. Hrcacs氏、Richard Florida氏をゲスト編集者に迎え、「Advancing the Creative Economy Approach for Urban Studies」と題した特集号となっています。Richard Florida氏(トロント大学教授)は、クリエイティブ・クラス理論で有名な都市研究者ですが、その理論をめぐっては世界中で様々な論争が巻き起こっています。今号ではR. Florida氏のグループに属する研究者による創造都市論に立脚した論文が多数掲載されています。その批判的検証を行った創刊号の存在と合わせ、世界の一流研究者相互による先端的で白熱した学術論争が今後期待できます。

詳しくは下記のサイトをご覧ください。  
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/journal.html>  
 また、論文の内容はサイエンスダイレクトへアクセスし、読むことができます。

<http://www.sciencedirect.com/science/journal/18779166>  
 なお、第5号ではF.Colbert氏(HECモントリオール)によるミニ特集が予定されています。

第4号掲載論文

Introduction

Kevin Stolarick, Brian J. Hrcacs, Richard Florida: Occam's curse, dialectics, and the creative city

Original Research Articles

Richard E. Ocejó: What'll it be? Cocktail bartenders and the redefinition of service in the creative economy

Michael Ripmeester: Missing memories, missing spaces: The Missing Plaques Project and Toronto's public past

Doreen Jakob: Constructing the creative neighborhood: Hopes and limitations of creative city policies in Berlin

Lisa Bornstein: Mega-projects, city-building and community benefits

Michael Seman: How a music scene functioned as a tool for urban redevelopment: A case study of Omaha's Slowdown project

Elizabeth Currid-Halkett, Kevin Stolarick: Cultural capital and metropolitan distinction: Views of Los Angeles and New York

Karen Chapple, Shannon Jackson, Anne J. Martin: Concentrating creativity: The planning of formal and informal arts districts.

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。  
 5/12 国際ワークショップ “The International Workshop on Urban Utopianism”  
 ～14 …香港浸会大学 第3・4ユニット

5/13 第11回 日本居住福祉学会全国大会・国際シンポジウム  
 ～16 …大阪市立大学 高原記念館 第3ユニット

5/25 第15回 阿倍野Religion-Cafe  
 …阿倍野プラザ 第3ユニット

6/18 クリエイティブミーティング2011  
 …クリエイティブセンター阿波座 第1ユニット

6/24 第9回 都市人文学研究所 国際会議  
 ～25 …ソウル市立大学

6/30 CCS国際ワークショップ ‘Chinese Cities and the Outside World’  
 …ミドルセックス大学(ロンドン) 第4ユニット

7/9 こりあんコミュニティ研究会・第2回研究大会・総会  
 …大阪市立大学 高原記念館 第3ユニット

■特別研究員(若手)公募  
 URP特別研究員(若手)募集(平成23年8月募集分)2011年7月に公表を予定しています。  
 情報⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2011年8月です。

URP Osaka City University | Urban Research Plaza  
 大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel: 06-6605-2071  
 e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄  
 ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩  
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニュースレター 第11号 2011年5月  
 編集委員会 佐藤由美、橋羽 愛  
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

key word's column

グローバル化し、均質化した現代都市のあり方と対比する中で、またルイス・マンフォードの『都市の文化』での都市の段階区分などに示唆を受けながら、自らの近世巨大城下町江戸の都市社会史研究を「伝統都市」という概念で意味づけたのは、吉田伸之氏(東京大学)であった。19世紀第4四半期に北米大陸に起源し、20世紀後半には全世界を覆った現代都市に対し、それぞれの歴史的文化的なかで固有のあり方を示す都市を伝統都市と呼んだ。さらに、産業革命以後の伝統都市のあり方に規定されながら、現代都市へと向かっていく過渡形態を近代都市と範疇化したのである。

伝統都市  
 【The Traditional City】

それ故、伝統都市は各歴史的世界の中で固有の類型を生み、多様であるが、日本では都城と城下町を二大類型とみなすことができる。そして、城下町が近代都市を経て現代につながってくる主要なものと位置づけたのである。筆者も吉田氏の問題提起を受けながら、近世大阪の都市社会史を進めてきたが、均質化を特徴とする現代都市においてさえも、都市の再構築に向けて、人びとが生きる基盤を共同で創りあげようとする場合、伝統都市において形成されてきたもの(正負を含めた社会的・文化的総体のあり様)が踏まえらるべきだと考えている。

塚田 孝(グローバルCOE事業推進担当者/文学研究科教授)

Taking hints from the stages of urban development described in Lewis Mumford's Cities and Culture, Professor Yoshida Nobuyuki of Tokyo University applied the concept of the 'traditional city' to his own research on the urban social history of early modern Japan's largest castle town, Edo. Employing that concept, he compared the character of Edo to that of contemporary cities, which are globalizing and growing increasingly homogeneous. In contrast to contemporary cities, which originated in North America during the final quarter of the 19th century and had come to cover the globe by the second half of the 20th century, Professor Yoshida called cities that displayed a distinctive character based on their respective historical cultures 'traditional cities.' Additionally, he categorized the modern city as a transitional city, one that was evolving into a contemporary city, but also restricted by the condition of the traditional city following the industrial revolution.

For that reason, traditional cities around the world gave rise to a diverse array of urban types, each shaped by the unique historical context in which they developed. However, in Japan, we can discern two broadly distinct types, capital cities and castle towns. Moving through the experience of modern cityhood, Japan's former castle towns occupy an important position linking traditional society to the contemporary world. Responding to the issues raised by Professor Yoshida, I have attempted to examine the urban social history of early modern Osaka. Yet, even in the increasingly homogeneous contemporary city, when people are working collectively towards urban revitalization in an effort to establish a shared basis of livelihood, I believe that they should take into account all of the social and cultural legacies of the traditional city, including both the good and the bad.

Tsukada Takashi (Global COE Programme Representative/ Professor, Graduate School of Literature and Human Sciences)



# 特集1 アート&アクセス 第3回シンポジウム・公演“Social Inclusion on Stage”

## SPECIAL 1 A+A 03 Social Inclusion on Stage

2011年3月19日(土)・20日(日)、「アート&アクセス第3回シンポジウム・公演 Social Inclusion on Stage」が、都市研究プラザ主催(共催:特定非営利活動法人こえとことば)とこころの部屋(ココルーム)、後援:在大阪インドネシア共和国総領事館)で、大阪市立大学田中記念館大ホールで行われた。両日あわせて約150名の参加があった。

本シンポジウム・公演は、アート&アクセス研究会にフラテルナル劇団(演出家・俳優マッシモ・マッキヤヴェッリ氏・女優ターニャ・パッサリーニ氏)を招聘し実施された。この劇団は、イタリア・ボローニャのホームレス支援組織を母体としたもので、イタリアの仮面劇「コンメディア・デッラルテ」に取り組んでいる。

芸術文化を通じた社会包摂及び社会包摂に対する芸術文化の働きが、芸術文化の新たな創造の場をも提供することを検証する目的で開催され、加えて、都市研究プラザが自ら創造の場を提供するという新たな活動の可能性を検討する機会ともなった。

3月11日に東日本大震災が起き、開催を見送ることも検討された。しかし、被災者への支援を多くの人が考える今こそ、芸術文化にしかできない社会包摂の形を考える機会と捉え、開催するに至ったことを書き添える。

ワークショップには計10名(男性9名と女性1名)が参加、19日の公演に出演するダンサーとして、20日の公演に出演する俳優として、マルガサリやフラテルナル劇団のメンバーと共に練習やリハーサルに取り組んだ。

20日の公演に俳優として出演する参加者の一人は、事前にコンメディア・デッラルテに関する本を読むなど準備に余念がなかった。ワークショップ初日からコンメディア・デッラルテで使用される仮面に強い関心を寄せ、力強く豊富な表現力を溢れさせていた。ワークショップは長い日には1日4時間以上続いたにも関わらず、休憩時間もセリフや動きを確認する熱の入れようであった。



一般市民が参加したワークショップの様子

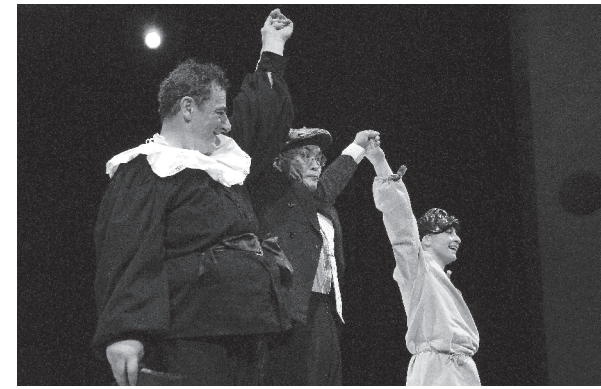
### ■公演《ガムラン・クリスタル:映しあう声と響きあう光》 社会包摂を表現したパフォーマンス

19日(土)午後、インドネシアのガムラン音楽と舞踊に取り組みながら、障がいのある人々等とともに表現活動を展開してきた「マルガサリ」と、西成をベースに釜ヶ崎の日常を語り、歌い込む人気ラッパー「SHINGO★西成」によるパフォーマンスが上演された。当日の演者でもある中川眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)の挨拶、在大阪インドネシア共和国総領事からのスピーチに続き公演が始まった。前半はガムランとダンス、マルガサリのメンバーの語りを中心とする映像で構成され、後半はこれらに加えて、SHINGO★西成のラップがマルガサリのメンバーとの掛け合いと共に展開された。パフォーマンスにより社会包摂が表現され、その課題が観客に投げかけられた。また、この公演には2名の一般市民がダンサーとして参加した。

### ■公演《ボローニャの仮面劇:広場から、広場へ》 社会を風刺するコンメディア・デッラルテ

20日(日)午後、フラテルナル劇団が取り組むイタリアの仮面劇「コンメディア・デッラルテ」作品が上演された。コンメディア・デッラルテは16世紀から18世紀にイタリアで流行し、仮面を付けた俳優による即興を中心とした演劇である。佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)の挨拶で始まり、「バラン

ツォーネ博士の長講釈と旅」、続いて2グループによる30分のワークショップ作品が公開された。俳優として参加した一般市民8名が自ら、彼ら・彼女らの置かれている状況を、作品として熱く表現した。



共演した市民と舞台挨拶するフラテルナル劇団

### ■シンポジウム《社会に浸透するアート》

#### 日・伊における芸術文化による社会包摂を考える

公演に続き、佐々木雅幸がモデレーターを務めるシンポジウムが開催された。最初に、大谷煥氏(NPO法人DANCE BOX代表)が8年前に始めた障がい者とのダンスワークショップと作品制作の活動を報告した。続いて、上田假奈代(都市研究プラザ研究補佐/ココルーム)はNPO法人で行ってきた二ツや生活保護受給者、障がい者等に対するアウトリーチ活動の現状を発表し、マッシモ・マッキヤヴェッリ氏はホームレスとのワークショップ内容とその手法、これら活動から得たホームレスの社会復帰過程における演劇の意義について説明した。その後の討論では、ホームレスや障がい者の芸術的感性は決して損なわれておらず、適切な働きかけによってセルフエスティームが高まり、自立に向かう大きなエネルギーを獲得できることが確認された。また、釜ヶ崎の人々からはとても緊張したが、楽しいワークショップであったとの感想や、次回は仮面制作もやりたいとの希望がだされた。



シンポジウムの出演者たち

### ■まとめ

19日のマルガサリとSHINGO★西成の共演は、ことば、音楽、ダンスによる表現を通して新たな世界観を観客に提示し、本公演が創造の場であることを実証した。また、20日のコンメディア・デッラルテの公演は、ワークショップ参加者が芸術文化を通して積極的に人や社会と関係を持ち、新たな事へ挑戦する力を見出す可能性を明らかにした。

これらの実験から得られた成果はシンポジウムにて確認され、今後もこうした試みを都市研究プラザが続けていく事が提案された。都市研究プラザが芸術文化による社会包摂の新たな局面を発信する日が遠くないことを期待させるものであった。

#### ■高島知佐子

(都市研究プラザ特別研究員/京都外国語大学講師)

On March 19-20 (Sat-Sun), 2011, A+A03 Social Inclusion on Stage, organized by the Urban Research Plaza, was held in the large auditorium of the Tanaka Memorial Hall at Osaka City University. About 150 people participated over the two days of the event. At the symposium, the Fraternal Company, who deal with assisting the social rehabilitation of the homeless through the Commedia dell'Arte, Italian masked theater, performed along with the group Marga Sari, who have dealt with self-expression activities for the handicapped and others through Indonesian gamelan music and dance, and the Rapper SHINGO★Nishinari who is based in the Nishinari area. In advance of the two days of performance, a workshop was held for ordinary citizens who live in the Kamagasaki area from March 15-18, and they created the works to be performed on the 19th and 20th. 10 of the workshop participants later appeared in the performances.

In the symposium held on the 20th, activists who deal with the homeless, the handicapped, and people on welfare gave reports on their own activities: Mr. Ohtani Iku (of the NPO group DANCE BOX), Ms. Ueda Kanayo (URP assistant/COCOROOM), and Mr. Massimo Macchiavelli (of the Fraternal Theater Company). They exchanged views on efforts to help the handicapped, the homeless, and others through creative activities in the arts and culture, and there was a lively response from ordinary citizens in the audience.

#### ■プログラム(全期間)

3月15日(火)~18日(金)

ワークショップ(西成プラザ)

3月19日(土)

公演《ガムラン・クリスタル:映しあう声と響きあう光》

出演:マルガサリ(ガムラン)、SHINGO★西成(ラップ)

3月20日(日)

公演《ボローニャの仮面劇:広場から、広場へ》

「バランツォーネ博士の長講釈と旅」

「ワークショップ成果上演」

出演:フラテルナル劇団・釜ヶ崎の人々

シンポジウム《社会に浸透するアート》

発表者:大谷煥氏(NPO法人DANCE BOX代表)

上田假奈代(都市研究プラザ研究補佐/ココルーム代表)

マッシモ・マッキヤヴェッリ氏(フラテルナル劇団演出家・俳優)

モデレーター:佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)

#### ■ワークショップ(15~18日)

##### 釜ヶ崎で生活する一般市民との共同制作

19~20日の公演には大阪市西成区の釜ヶ崎を拠点に生活する一般市民が参加した。それに先立ち、西成プラザにおいて、4日間にわたるワークショップを開催した。



## 特集2 バンコク都市文化研究フォーラムとジョグジャカルタアカデミックフォーラム SPECIAL 2 The 9th Urban Culture Forum in Bangkok & The 9th Academic Forum in Yogyakarta

2011年3月、バンコクとジョグジャカルタでそれぞれ9回目となる文化芸術に関する国際フォーラムが開催された。また、今回新たにタイ・プーケットでもアーツマネジメントフォーラムが開催された。

### ■第9回 バンコク都市文化研究フォーラム

2011年3月2日(水)~4日(金)、チュラロンコン大学において、第9回都市文化研究フォーラムが開催された。このフォーラムは、都市研究プラザと文学研究科都市文化研究センター、チュラロンコン大学芸術学部の共催で、2003年より毎年開催され、バンコク・サブセンターの主要事業のひとつとなっている。

今回のフォーラムはArts Management-City Management: Models for Sustainable City Renewal and Cultural Continuityと題し、17の大学・団体から、教員、大学院生、アート関係者など100人以上の参加者があった。大阪市立大学からは、発表者4人を含む7人が参加した。

まず、フォーラムではチュラロンコン大学芸術学部のSuppakorn Disatapundhu学部長によって口火が切られ、同大学学長のPirom Kamolratanakul教授がオープニングスピーチを行った。続いて佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)が“Urban Regeneration through Cultural Creativity and Social Inclusion”と題した基調講演を行い、アートや文化を利用した文化的生産と文化的消費によって社会包摂がなされる可能性を提示した。また、Kriengpol Padhanarath氏(Bangkok Metropolitan Office副所長)がバンコクにおけるアートや文化の宣伝戦略の内容や可能性について述べた。

セッションでの発表では文化やアートによりコミュニティが結束する事例や阻害される事例などが報告され注目を集め、また、美術館等の文化行政の成功事例、チェンマイにおけるツーリズム戦略とその事例等、貴重な事例も多数報告された。院生も自己の研究活動の発表を行うことで聴衆から重要な指摘を受ける機会を得た。

最後に中川眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)は、長期間にわたるチュラロンコン大学とのフォーラムの共同開催が深い信頼関係を形成し、フォーラムの質と規模が加速度的に向上してきたと述べ、社会におけるアーツマネジメントの有用性を示す本フォーラムの意義を強調した。また、その成果は、共同編集学術誌*Journal of Urban Culture Research*を通じて世界に問うていく予定である。



記念撮影

### ■プーケットアーツマネジメントフォーラム

2011年3月6日(日)、タイ王国プーケット市のSatree Phuket Schoolにおいて、プーケットアーツマネジメントフォーラムが開催された。このフォーラムは、都市研究プラザ(バンコク・サブセンター)が主催して行ったものである。

前日の市内の巡検ののち、フォーラム当日はタイ語、英語で発表、質疑応答、議論が行われた。セッションでは、Ledee Pumiputavorn氏(元高校教師)がプーケットのコミュニティや社会の歴史を、Kamol Phaosavasdi氏(チュラロンコン大学准教授)が2005年に起きた大震災後の活動事例をもとに報告し、続いてWorapol Wongwiriyakul氏(Hallo Phuket Tours社長)がプーケットの観光の現状を報告した。最後にPanuwat Phakdee-auksorn氏(ソクラーナカリン大学講師)がプーケットの観光の現状と課題を分析し、その展望を述べた。

本フォーラムは、震災からの復興、少数民族、観光資本主義などの問題を抱えたプーケットの課題を克服するための議論の切っ掛けとなりうるものであった。アーツを用いる草の根から変化を引き起こすという視点からも非常に興味深い討議内容であった。

■堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

On March 2-4 (Wed-Fri) 2011, the 9th Urban Culture Forum was held at Chulalongkorn University in Bangkok. This forum is jointly organized by the Urban Research Plaza and Urban-Culture research center, Faculty of Fine and Applied Arts at Chulalongkorn University and has been held each year since 2003. This year's theme was “Arts Management-City Management: Models for Sustainable City Renewal and Cultural Continuity,” and there were over 100 faculty, graduate students, and people involved in the arts participating from 17 different universities and organizations.

On March 6 (Sun) 2011, The Arts Management Forum was held in Phuket, and there were intensive discussions around the keywords ‘earthquake disaster,’ ‘tourism,’ and ‘community arts management’ by the four speakers and the more than 20 other participants.

### ■第9回 ジョグジャカルタアカデミックフォーラム

2011年3月23日(水)、インドネシア共和国のガジャマダ大学において、第9回アカデミックフォーラムが開催された。このフォーラムは、都市研究プラザと文学研究科都市文化研究センター、インドネシア国立芸術大学(ISI)ジョグジャカルタ校、ガジャマダ大学文化科学部の3大学の共催で、

2003年より年に一度開催されており、ジョグジャカルタサブセンターの主要事業のひとつとなっている。

今回のフォーラムはThe Arts and Cultural Managementと題し、14の大学・団体から、教員、大学院生、アート関係者など80人以上の参加者があった。大阪市立大学からは、発表者2人を含む7人が参加した。

まず、フォーラムはガジャマダ大学文化科学部のAmir Ma'rif副学部長のオープニングスピーチによって始まり、水内俊雄(都市研究プラザ副所長)の“Urgent Needs for Inclusive Society; Facing the calamity of Earthquake and Tsunami in March 11”と題した基調講演が続いた。

そして、スマトラ島北端、アチェのダンス、Rapai Gelengが上演された。アチェは2004年のスマトラ島沖の大地震と大津波で最も深刻な被害を受けたが、そこから復興を成し遂げている。この上演は、ジョグジャカルタ・サブセンターのスタッフが、大地震や津波で被災したばかりの日本の人々を元気づけたいと企画したもので、数々のコンテストで優勝しているガジャマダ大学アラビア語専攻のアチェ出身学生グループによって演じられた。非常にエネルギッシュで驚くほど絶妙なチームワークに支えられたダンスは、大災害からの復興を可能にした、アチェの人たちの精神を表していると感じられた。



スマトラ島北端、アチェのダンス、Rapai Geleng

発表はふたつのセッションに分かれ、伝統的な文化やその文化を残すということにかかわるマネジメント、コミュニティのマネジメントへのかかわりについて、さまざまな角度からの発表、議論がなされた。フォーラムのタイトルはThe Arts and Cultural Managementであったが、コミュニティがもう一つの重要なキーワードとなった。

セッション1では、まず、横山俊祐(工学研究科教授)が、日本人の庭や緑を大切に文化を採り上げ、公共住宅の建替えの過程でコミュニティの庭を作った事例を紹介した。Yulriawan Dafri氏(ISI教員)はスマトラ島の文化遺産に関して文化マネジメントのあり方への提言を行い、Sektidi氏(ガジャマダ大学教員)は、保存を含む文化遺産マネジメントへの地元コミュニティ参加について発表を行った。

セッション2では、池谷啓介(都市研究プラザ特別研究員)が、大阪におけるアートマネジメントの例として、アートイベントや伝統的イベントなどコミュニティのネットワークを強化する活動事例を紹介した。Andre Indrawan氏(ISI教員)は、音楽教育のマネジメントと音楽科のあるべき姿について述べ、D.S. Nugrahani氏(ガジャマダ大学教員)は、文化遺産や伝統に関する教育の重要性を説き、小学生を対象にした教育プログラムについて話した。

また、それぞれの発表者に対する質問も多く出され、これらのトピックに対する参加者の意識の高さをうかがわせた。



参加者による記念撮影

フォーラムのあと、本学の中川眞とISIのHermin Kusmayati学長、翌日には水内俊雄と中川眞、ガジャマダ大学文化科学部のIda Rochani Adi学部長との会談が行われ、このフォーラムのさらなる広がりを目指すこと、3大学間でのさらに緊密な連携を含めた将来的な展望について確認しあうことができた。

■岡戸香里(G-COE特別研究員)

On March 23 (Wed) 2011, the 9th Academic Forum was held at Gadjah Mada University in Yogyakarta. This forum is organized by three universities, the Urban Research Plaza and the Urban-Culture research center (Osaka City University), the Indonesian National College of the Arts Yogyakarta Campus, and Faculty of Cultural Sciences at Gadjah Mada University. The forum has been held annually since 2003, and this year's theme was “The Arts and Cultural Management.”

As well as the arts and cultural management, including tradition and cultural heritage, there were also many presentations using the keyword ‘community.’ There were many questions for the speakers from the audience which demonstrated the high level of awareness of the participants.



## 10 ■円座「近世都市における流通・運輸と身分的周縁」 Roundtable (ENZA), "Commodity Circulation, Transportation, and Status Marginality in the Early Modern City"

2011年1月10日(月)、大阪歴史博物館において、円座「近世都市における流通・運輸と身分的周縁—法と社会の視点から—」と題する研究会を開催した(G-COE都市論ユニット、近世大阪研究会、文学研究科重点研究、都市史研究会・とらっど3共催)。日本近世において巨大化を遂げる諸都市では、社会的分業をとまなないながら多様な諸社会集団を生成させていた。そのあり様は、それぞれの地域社会が培ってきた固有の歴史的蓄積と不可分の関係にあった。本円座では、流通や運輸に携わる諸社会集団をテーマとする6本の報告を用意した。特に、都市大阪の内部の社会集団だけでなく、北陸・東海・関東などの諸都市における事例報告も加えることで、地域固有の社会構造に規定された流通構造のあり様を浮き彫りにし、列島規模での比較類型化を目指したものであった。

午前中、3本の報告が行われた。まず八木滋氏(大阪歴史博物館学芸員)が、従来の流通史のようなく特権的流通>とく農民的商品流通>という二項対立的な把握では具体的な商人や取引形態の実態など見落とされてしまう問題が多く、「特権」と「自由」の捉え方には再検討が必要であること、また市場を中世・近代の市場のあり様も視野に入れながら見通したうえで、近世固有の市場のあり様を捉える必要があることを指摘した。つづいて、西本菜穂子(都市研究プラザ研究補助スタッフ)は、大阪の質屋や古手屋、古手貸物屋が、「消費と廃棄のシステム」や「再流通」を行う諸社会集団であるがゆえに町奉行による盗品捜査の御用を担う仲間として存立していたこと、そのことが仲間内外に対する統制を可能とさせ、仲間相互の関係性を規定していくことなどを指摘した。また、島崎未央(文学研究科大学院生)は、「都市大阪における種物流通」と題し、種物問屋について幕府の流通統制に規定されて集団化していく姿や、そのもとの問屋の果たした機能について報告した。午後からは、3名の報告が行われた。原直史氏(新潟大学)は、新潟湊とその後背に

広がる地域社会における米穀流通のあり様に迫った。巨大地主が展開する新潟周辺では、藩の蔵米だけでなく地主作徳米がかなり流通していたこと、地主が各所に配置する蔵所から米穀を出さずに行う手形売買が行われていたことなどを明らかにした。後藤雅知氏(千葉大学)は、上総国養老川において幕府から課される川舟運上金や岩槻藩への川舟役金の請負・上納の実態を、その担い手である請負人や林守、さらには流通の結節点にいる運送宿との関係のなかで明らかにした。最後に、山田俊幸氏(東京大学大学院生)は、いわゆる幕藩制流通構造が解体し、全国的市場が成立するとされる19世紀における名古屋と上方を結ぶ海運の担い手について、名古屋下り廻船問屋と熱田廻船問屋との争論を分析することで明らかにした。以上5本の報告ののち、全体討論が行われた。

限られた日程ではあったが、充実した6本の報告が行われ、示唆に富む円座であったと思う。とくに、御用や特権を自明のものとするのではなく、それを担う存在や集団のあり様を、具体的な流通の実態のなかで捉えることで、これまでの流通史研究で整理された二項対立的な理解を乗り越えることができるのではないだろうか。

なお、今後は流通だけでなく、生産・芸能・宗教・勸進などに携わる諸社会集団をテーマにした研究会を積み重ねていく予定である。 ■山下聡一(G-COE特別研究員)



円座の様子

On January 10 (Mon) 2011, a research conference was held entitled "Roundtable (ENZA): Commodity Circulation, Transportation, and Status Marginality in the Early Modern City". It was jointly organized by the G-COE Urban Theory Unit, the Early Modern Osaka Research Group, Graduate School of Literature and Sciences Priority Research and Urban History Research Group-Trad 3. In the several cities that were developing into metropolises in early modern Japan, a variety of social groups were formed accompanying the social division of labor. Their nature was conditioned by the relation between their distinct cumulative histories and the negative aspects fostered by their respective local regions. In this roundtable, six reports were presented on the theme of the various social groups that were involved in circulation and transport, and afterwards there was an open general discussion. In the future, we plan to hold additional research conferences on the various social groups involved not only in circulation but in other areas such as manufacturing, the arts, and religion.



円座のポスター

## 豊崎プラザ 大阪らしい長屋と路地の再生実験

現場プラザ短信1

### 北終長屋(きたはてながや)改修プロジェクト

2007年から始まった豊崎プラザにおける長屋改修プロジェクトの6例目となる北終長屋改修プロジェクトが始まった。これは、5戸長屋のうち4戸に耐震補強を施し、そのうち3戸の内部改修を行う計画である。この耐震補強と減築をテーマとする豊崎プラザの長屋改修プロジェクトは、大阪の伝統的な居住文化である長屋建築を現代に蘇らせることである。

北終長屋は明治時代に建てられ、築後100年以上が経過している。そのため柱や壁の傷みがはげしく、後世の改造で隅の柱が途中で切られたままの箇所もあった。2007・2008年度の改修は賃貸住宅としての長屋再生、2009年度はSOHOとしての利用を想定した改修であった。今年度の改修では段差を小さくするなどバリアフリー対応を重視し、福祉的な活用を模索している。

■上原充(豊崎プラザ研究補助スタッフ)



工事中の北終長屋 新旧の柱が入り混じる

## 和泉プラザ 「地域の歴史的総合調査」の取り組み

現場プラザ短信2

### 2010年度和泉市合同総合調査報告書 一富秋町一

和泉プラザでは、昨年の和泉市合同調査(日時:2010年9月28日~30日、調査地:和泉市富秋町、参加者計61名)の報告書を、実行委員会を中心に作成した。報告書は2011年5月刊行の『市大日本史』14号に掲載される。



調査最終日の報告会の様子(富秋中学校にて)

和泉市北部の平野部に位置する富秋町は、高度成長期から離農と都市化が進行した地域であり、歴史資料なども限られたなかでどのように調査を実施し地域の歴史を把握するのかが準備段階から課題となった。当日の聞き取り調査では、都市化以前に広がっていた農地や水利環境、聖神社子孫のつながりを受け継ぐだんじりなどについて具体的に明らかになった一方、かつて富秋で行われていた行事は話者によって内容に異なる部分があり、その復元は困難であった。調査後は、かつての生活の記憶が失われつつある地域の「今」を記録すること、すなわち地域の現状記録の重要性をあらためて確認し、この点をふまえて報告書の作成に取り組んだ。なお、当日の史料調査で扱った奥野紀代子氏所蔵史料については、日本史演習IV(担当:佐賀朝)の授業でさらに詳細な分析を行った。この成果も報告書とあわせて掲載される予定である。

■久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)

## クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

現場プラザ短信3

### 「創造の場」の社会実験・クリエイティブサロン7の開催

クリエイティブセンター阿波座(CCA)では、毎月1回、創造活動の発展を促すような「創造の場」の生成と地域とのゆるやかなネットワーク形成のための社会実験としてクリエイティブサロンを開催している。2011年3月のサロンは、CCAから徒歩3分ほどにあるカフェ ミリバールを会場として、1996年に「Contents Label CAFE」(大阪市中央区北久宝寺)をオープンして以来、地域とアート、食や「人」をつなぐ様々な場



奥山氏の報告を聞く参加者(カフェ ミリバールにて)

デザイン関連産業を中心とする事業者集積地域の中心に位置する本プラザは、クリエイターのオフィススペースが入居する改装されたビルの一画にあります。ここでは、「扇町プラザ」の機能を引継ぎ、大阪市全体の創造産業を対象に、その発展に向けた政策研究と連携活動の推進をめざします。

を生み出してきた奥山天堂氏(有限会社 アートニクス代表)の報告と意見交換を行った。参加者は、20代から60代までの大学教員、研究員、大学生、大学院生、テレビ局勤務者、企業内デザイナー、文化施設職員、カフェ経営者、元行政職員の9名で構成され、営利・非営利、ジャンル、年代、キャリアと多様な構成であった。

サロン開催後、依頼したアンケートの中で、「サロンが色々なところで行われることは、町を知る上でも重要だと感じた」「『豊かさとは必ずしも両立しないのでは?』という奥山さんの問いかけが自身の問題意識と共鳴した」など、気づきや自身の活動・意識の確認があったことが指摘されていた。

■上野信子(G-COE特別研究員)



## 2U マンスリーアートカフェ Monthly Art Cafe

2011年2月1日(火)から28日(月)までの28日間、都市研究プラザ船場アートカフェ主催で、3回目となるマンスリーアートカフェを開催した。船場アートカフェを会場に、2月の1ヶ月間にわたって毎日レクチャーやワークショップなどを無料で開催するものである。船場アートカフェを構成する大阪市立大学の教員を中心に、ゲストとしてアーティストやデザイナーなどのゲストを交えながら、バラエティ豊かな講師陣とテーマでプログラムを組んだ。

平日は開催時間を夕方の1時間30分程度として、オフィスワーカーが仕事帰りに気軽に立ち寄りもらえるよう配慮した。船場で働き、暮らす人たちに大学知やアートに触れる機会を提供することで、船場の日常をより知的でクリエイティブなものとしてもらうことを目的としている。

今回も多彩なプログラムを準備した。例えば中川眞(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)はサウンドスケープ・デザイナーの庄野泰子氏を招き、音楽とは異なる「経験としての音空間」が環境や人間にどのような効果を与えるのか紹介した。また第2ユニット長の嘉名光市(工学研究科准教授)は都市計画に関する議論を戦前の専門誌に見出し、いま都市について語ることの可能性について語った。

また、山口悦子(都市研究プラザ特別研究員/医学研究科



船場アートカフェを会場に行われたレクチャーの様子

講師)による大阪府立大学附属病院でのアートプロジェクトの紹介、アーティストの西純一氏を講師に招いてショッピングバッグに絵を描くワークショップ等を行った。



ショッピングバッグを使ったワークショップ

参加者の延べ人数は254名、一日平均10名弱であったが、30名を超えた日から、参加者1名にとどまった日まで、バラツキがあった。社会的なテーマや抽象的な内容、週末は参加者が集まりにくく、雪が降るなど天候にも左右された。開催したプログラムはどれも充実した内容であり、参加者は概ね満足し、継続を希望する声も多かった。しかし、プログラムの編成や広報にはまだまだ改良の余地がある。特に参加者に占める船場で働く人・暮らす人の割合は13%にとどまり、地域の関心を得るには至っていない。今後の課題である。

■高岡伸一(都市研究プラザ特任講師)

From February 1 (Tue) through 28 (Mon) 2011, this year's third annual Monthly Art Cafe was put on over a 28 day period, organized by the Urban Research Plaza and the Senba Art Cafe. Using the Senba Art Cafe as a venue, faculty from Osaka City University and artists and designers became lecturers and held a rich variety of lectures and workshops, presenting both art and the university's insights to office workers who are employed in Senba and to people who live there.

## 船場アートカフェ 芸術によるコミュニティ再構築

### 北船場近代建築サミット in 旧・八木通商ビル

2011年3月19日(土)、「北船場近代建築サミット in 旧・八木通商ビル」(主催:船場近代建築ネットワーク、共催:船場アートカフェ他)が開催されました。北船場の近代建築のひとつである旧・八木通商ビルを会場として、近代建築を活用したまちづくりの可能性について議論がなされました。

パネルディスカッションでは、北船場の代表的な近代建築のオーナーが一堂に会し、近代建築ライトアップなどの取り組みが紹介されました。このようなオーナー間の協働による試みは、近代建築の文化的価値を再評価する全国的な流れの中で、重要な役割を果たしています。

近代建築は、まちに眠る文化資産です。歴史ある建造物として保存だけでなく、都市の共有財として現代社会の文脈に再配置することで、近代建築はまちの魅力を伝える「生きた」文化となります。このような試みを通じて、大阪のまちがより豊かに活性化していくことが期待されます。



近代建築オーナーによるパネルディスカッション

■石川 優(G-COE特別研究員)

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

## 4U 国際ワークショップ“Traceable Cities”

2010年11月11日(木)～12日(金)、イギリス・マンチェスター大学・建築学部のマンチェスター建築研究センター(MARC)と都市研究プラザの共催でTraceable Cities(「トレース可能な都市」)と題するCCSワークショップを現地開催した。本ワークショップの目的は、90年代から科学哲学・科学社会学だけでなく人文・社会科学の様々な領域で大きな論争を巻き起こしてきたブルーノ・ラトゥール(Bruno Latour)の方法論を共有しつつ、都市建築や都市文化研究の最前線を浮かび上がらせ、彼の手法を乗り越えようとするものである。具体的には、これまで都市を主観的で個人化・個別化されたビジョンの結果として捉え、物質的なインフラや地図さらには人工物(artefacts)として客体化することが多かったことを批判的に捉え直し、「人間」と「非人間」との関係性の変容プロセスを捉えようとするところに特徴がある。

2日間にわたるプログラムにはイギリスをはじめブルガリアやスイス等、主に欧州から新進気鋭の研究者25人が参加した。都市研究プラザからは岡野浩



コアの企画メンバー

(都市研究プラザ副所長)が日中韓の「文化編集」の差異について報告し、オックスフォードCCSサブセンター長でCCS副編集長のトモ・スズキ教授がセッションの司会および討論者として参加した。共催者側のリーダーであるAlbena Yaneva氏のこのワークショップにかける彼女の熱い「思い」が表明され、MARC所長で環境学部環境開発学科長のシモン・ガイ教授の論文など11本の報告が行われた。2日目最後の「出版に向けての討議」はCCSの位置づけや都市研究プラザの目指す方向性とMARCのコミットメントの在り方や欧州のネットワークづくりのことなど、様々な問題について真摯な討議が行なわれた。この成果は、URPドキュメントに収められ、さらにラトゥール論文とともに、CCS(City, Culture and Society)の第2巻第3号に掲載される予定である。

■岡野 浩(都市研究プラザ副所長)

On November 11 (Thu) and 12 (Fri) 2010, a CCS Workshop entitled “Traceable Cities” was held on location in the field, jointly organized by the URP and the Manchester Architecture Research Centre (MARC), a research group affiliated with the University of Manchester's College of Architecture. The results will be compiled in the URP's document series, and we are planning to publish them in issue Number 3, Vol. 2 of CCS (City, Culture and Society).

## 海外サブセンター便り from Seoul

### URP Seoul sub-center

ソウル・サブセンター

The Seoul sub-center is run by Korea Center for City and Environment Research (KOCER), a non-profit and independent research organization founded in October 1994. KOCER attends to analyzing urban issues and finding their reasonable solutions, especially focusing on the problems of the grassroots. At the moment several research projects and action programs are underway on homelessness, squatting issues, participatory planning process, housing improvement organizations etc.

Joining the network of URP as a sub-center, KOCER has been able to develop even stronger relationship with Osaka City University and an even wider network with other sub-centers. More chances to see researchers and activists, who work with communities and have various experiences, has been contributing to our new trials.

The Seoul sub-center is expecting to continue Korea-Japan exchange program on homelessness this year. We look forward to making a wider network among East Asian cities too.

■Jong Gyun Seo (Research Fellow KOCER)



ソウル・サブセンターのメンバー

ソウル・サブセンターは、韓国都市研究所(KOCER)により運営されている。KOCERでは、ホームレスや不法占拠、居住支援組織等の草の根レベルの問題に焦点をあて、都市問題の分析やその解決策を見いだす研究を行っている。

サブセンターとしてURPのネットワークに加わり、幅広いネットワークを構築するとともに、様々な出会いや経験が新たな試みに寄与するものと思われる。今年もホームレスの韓日の交流プログラムを継続するとともに、東アジアでの幅広いネットワークを築いていくことを楽しみにしている。



3U

台北サブセンター開設記念ワークショップ

Workshop to Celebrate the Establishment of the Taipei sub-center

2010年9月3日(金)に開設された台北サブセンターの開設記念ワークショップが、2011年3月8日(火)から12日(土)にかけて、国立台湾大学及び台北市内の社会的不利地域(萬華区・中正区界隈に立地する公営住宅団地及び単身高齢者や生活保護受給者が多数居住する簡宿街他)にて開催された。今回のワークショップはフィールドサーヴェイも兼ねて、台北サブセンター関係者の他、類似研究プロジェクトを実施している香港及びソウルサブセンターの関係スタッフや研究者・ワーカーが集まって行った。

まず、台北サブセンター関係者が台北市内の不利地域の歴史的経緯を含めた都市形成・都市問題及びまちづくりに関する概要説明を行った後、台北市内でフィールドサーベイを行った。

3月9日(水)は、旧台北県を一つにした新北市政府との専門家会議も行われた。新市庁舎で行われたプレセッションには、副市長ら50名が参加し、あるべき社会住宅像をめぐる、都市研究プラザから紹介を行った。



水内副所長によるプレゼンテーション(忠勤里コミュニティーセンターにて)

ワークショップはⅡ部構成で進められ、第Ⅰ部では各サブセンターからの参加者による各国の現状及び政策対応、民間支援団体による実践報告が行われた後、相互の経験交流の時間が設けられた。

第Ⅱ部では東アジア都市で共通する住宅困窮問題、不利地域の地域再生に関する都市間交流の通路を安定的に確保するための包摂都市に向けた東アジア都市ネットワーク(Inclusive City-Net)の形成に関する議論が進められ、その結果、次回第2回目のワークショップを2012年にソウルで開催することが確認された。

また今回参加できなかった上海などより多くの参加者を募り、東アジア都市ネットワーク(Inclusive City-Net)を充実化かつ安定化させていくことを参加者一同が合意した。

<日程>	視察先の特徴及び調査内容
3/8(火) 午後	宝蔵巖芸術村:旧国民党軍人の居住住宅を改造し一般開放すると共に芸術家の活動の場として提供
3/9(水) 午前 午後	台北橋界隈:臨時工、日雇労働者及びホームレスへの就業斡旋所が位置する台北の代表的な寄せ場の一つ 市庁舎:新北市政府との専門家会議 中興病院:台北在住ホームレスが利用する市立医療機関(MSWによるプリーフィングに出席)
3/10(木) 午前 午後	龍山寺界隈の低価格住宅視察及び居住者インタビュー調査実施 台北市勞工局・社会局及び民間団体との意見交換ワークショップⅠ開催(勞工局就業サービスセンター会議室)
3/11(金) 午前 午後	福民低価格住宅(=公営住宅)及び南機場国民住宅視察及び居住者インタビュー調査実施 ワークショップⅡ開催(忠勤里コミュニティーセンター)
3/12(土) 午前	信義公民館:台北市でもっとも古い眷村「四西南村」視察(歴史的な建物を改修し博物館及び文化活動の拠点として活用)

今回のワークショップの成果は、まず、ホームレスの人々や不利地域への支援経験を持つ台北の支援団体や国立台湾大学がコラボレートし、同様の問題意識や実践経験を持つ東アジアの都市間の研究や実践経験の交流を図ったことであり、それを不利地域(現場)にてワークショップとして行ったことである。また、今後も継続して交流を行うことができるよう、都市間ネットワークの構築に向けた環境整備に対し、参加者全員が同意したことも成果の1つである。その第一歩として、第2回はソウルサブセンターがホストとなり、ワークショップを行うことが確認された。なお、今回も含めた長期的な交流経験をCCSやドキュメント、その他関連文献の出版など可視的なアウトプットとしても刊行することを予定している。

■全 泓奎(都市研究プラザ准教授)  
ヒェラルド・コルナトウスキ(G-COE特別研究員)

From 8 to 12 March the URP in collaboration with National Taiwan University, Taipei Homeless Assistance Network and Hong Kong and Seoul sub-center organized a workshop to celebrate the establishment of the Taipei sub-center. The workshop consisted out of 2 parts, being field trips and surveys in the inner-city areas of Taipei and presentations by participants from each sub-center. On 9 March, members from the Osaka team also gave presentation on housing welfare in the new Taipei City Hall.

The Taipei workshop has brought all the Asian sub-centers members together to initiate an "Inclusive City Network" project to tackle the inner-city regeneration issues of the major East-Asian cities. Next workshop will be held in Seoul.

西成プラザ

生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

現場プラザ短信5

あいりん地域簡易宿泊所・転用アパート利用者共同調査

西成プラザは、大阪市立大学文学部社会学教室の授業「社会学実習b」と共同で、2010年の夏にあいりん地域簡易宿泊所・転用アパート調査を実施した。西成プラザが企画した簡易宿所オーナーとフロントへの聞き取りに社会学教室が協力し、社会学コースの学生メンバーが企画・実査した利用者アンケートとライフヒストリー調査に西成プラザのメンバーが参加した。

利用者アンケートでは155名から回答をいただき、さらに37名の方にライフヒストリーの聞き取りを行った。その結果、簡易宿泊所・アパートの利用者は、日雇だけではなく多様な仕事や経歴をもっていること、居住歴5年未満が6割以上と短いこと、友人関係の有無と精神面の健康に強い関連があることなどが明らかになった。また利用者のタイプとあいりん地域との関わり方の違いについても興味深い結果がえられた。

学際的な共同研究の難しさと同時に不可欠なことは、問題設定や研究方法の違いを尊重しあい、互いの貢献に十分に配慮しあうことであろう。そのためにも、あらかじめ十分な時間をかけて調査計画を立てることが必要である。その意味で、今回の共同調査から得られた教訓は大きなものであったと思う。

今回の調査結果は社会学実習の報告書としてひとまず2011年3月に発行したが、今後はさらにデータの分析を進めていく予定である。  
■川野英二(文学研究科准教授)

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が蓄積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。

大淀プラザ

ホームレス支援から地域のネットワーク/人材の創造

現場プラザ短信6

おおよど縁パワーネット・シンポジウム

「ささえあいの新しいかたち。地域の明日を考える」

おおよど縁パワーネットは、大淀プラザと同じ旧天神橋温泉内の男性浴場を拠点に、昨年度は地域の人々と連携し、地域の互助を仕事に、を合言葉に、大阪市の人材育成支援事業を活用しながら多くの活動を積み重ね、地域に頼られる組織として認知されてきた。その活動を振り返り、今後の地域での新しい支えあいのあり方をともに語らう企画として、シンポジウム「ささえあいの新しいかたち。地域の明日を考える」が、3月5日(土)の夜、都市研究プラザ後援のもと、近隣の豊崎東会館で行われた。

新進気鋭の社会思想家であり、地域研究者でもある中島岳志氏(北海道大学准教授)の基調講演は、札幌で「なぜ発寒商店街にカフェハチャムをつくったのか」という意表を突くテーマであった。秋葉原事件の容疑者との接見からはじまり、なぜ彼は友達がいるのに孤独であったのか。本当の居場所が地域に見いだせないことを乗り越える柔らかな関係を紡ぎだされるような仕掛けが必要で、その居場所が衰退しかけていた札幌近郊の発寒商店街であり、そのユニークな活性化の取り組みであったのである。

その後、おおよど縁パワーネットの事務局長の岡本友晴氏の活動報告と北区長や市民局、更生施設の寮長、社会福祉協議会、地元の連合町会長をまじえた水内の司会によるパネルディスカッションは熱気を帯びたものとなった。百人以上、立ち見もでるシンポジウムは、中島氏が奇しくも北区出身であったこともあり、今後の地域の活動の将来をまさしくエンパワーしたものであった。

■水内俊雄(都市研究プラザ副所長)

旧大淀区天七に立地し、近接して更生施設や一時保護所、ホームレス自立支援センターの大阪市の日雇、ホームレス支援施設があります。元銭湯を利用した本プラザは、ホームレス現象のオブザーバトリ(観測所)として後方支援にあたり、同時に広い空間を利用した、アートによる地域ネットワーク創造、人材創出の拠点をめざしています。

阿倍野プラザ

近代長屋を活用した居住福祉支援の試み

現場プラザ短信7

阿倍野Religion-Cafe冊子化とその内容

「無縁社会」という言葉が流行語になっている近年の日本社会は「孤独」、「老い」、「死」といったものが中心的なテーマになっている。にもかかわらず、それらに密接にかかわっているはずの宗教への社会的認知が乏しい。そこで「流動的で複雑な現代社会に宗教はどのように対峙しているのか」という問いをもとに、水内俊雄(都市研究プラザ教授)、川浪剛(僧侶)、黒木宏一(都市研究プラザ特別研究員)、白波瀬達也(G-COE特別研究員)が中心となり、バイオニア的な実践を行っている宗教者を発掘・招聘する対話型レクチャー「阿倍野Religion-Cafe」を2009年8月に発足させた。

2011年3月までに計14回開催してきたが、それらのうち、「宗教と翻訳言語、および芸術表現」の観点から4つのレクチャーを編集した冊子(GCOE Report Series13)を刊行するに至った。この冊子は戸次公正氏(浄土真宗大谷派南浜寺住職)「浄土真宗 ~日本語で読むお経(法事)の実践より~(2009年8月25日)」、戸次公正氏(同上)「浄土真宗入門Ⅱ ~阿修羅像のバックグラウンドを知る~(2009年9月22日)」、本田哲郎氏(フランスシコ会・カトリック司祭)

「カトリック入門 ~聖書を原語から訳し直す~(2009年11月25日)」、藤林イザヤ氏(京都中央チャペル牧師)「ゴスペルの歴史と現代における展開(2010年2月24日)」等のレクチャーをもとにしている。さらに、多様な立場の人々が集う阿倍野Religion-Cafeならではの質疑応答が収録されており、臨場感のある内容になっている。なお、次号は「宗教とまちづくり」を柱としたレクチャーを編集する予定である。  
■白波瀬達也(G-COE特別研究員)

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。



冊子の表紙